





少年 半古自画



明和丁亥年

信上田造



春の何れかの早らくる多分
ありきえおちよ他の時みり
流るるこゆるふしぬ

二丁しもあるに流れて柳下も 千苓

花や明けをふしよ不破の美 雪帯

多し波を流して以てふか 有常

柳うや垣もふらぬやう同生

左十

あふやおふーの伊音とも

茶煙

草の若れ魁より坊つくくー

氣隘

禱えを祭残しを沼の雪解う那

如毛

日れ阿ーの詠歌思をちきるるな

裡中

巻中もふらふとさう縁ふれしく

志仙

山吹也金魚れすむもあの流れ

五因

家々もふらふもゆらふ也世移の梅

林子

ままらぬかーの連をう匠さう

女
権臣

毛とくもふらふかきく思んか

羅茂

爪の暮れ祓ふて名柳う那

少年
半古

奏字も人すーのさやいぬれさ

一至

ふくみて猫の花しく柳之葉
花の咲程も二ほおやと名れこ
人々を心をもぬ袖に菜之那
定らぬ口知えりゆく雲雀哉
老てく世ふれ及とるる根をら子
玉賈
李卿

柳賜

鉄流

夏二

玉賈

李卿

あはれ

あはれうひ里香のこけ何可し
新月

あはれやまはれ極境も知来ふて哉
琴宇

簡端

凡成神を極くしふいそくり哉
貫古

あはれしるもこ由名柳之那
佐久 雞山

冬景

こころの白だつてはるかにあつた
やうな神とさるるに
こころをさるるの

まざりくはさかすまをいふ

志仙

ゆりともさるる猫とた人は哉

林子

名はあふれどもさるるうき

智中

梵ハ又たかくはれほとおち

五因

ゆく水れきさうとさるる

鉄嵐

初まのとももはるるさるる

如水

風の来てさるる邪うた

柳福

一川家いすらふさるる

一玄

組板へのれを笑つたさるる

系随

系れおつたさるる

字江

茶花 肥了又 けりて 世の ころ 菊 茶煙
木のこゝろ 熊手やも けて きた ころ の 花 十
官 船の あろ 社 多 地 海 比 志 所 常
る させ 組 せ なる 方 み せ 然 哉 玉 賈
此 一 一 せ 陽 も 入 神 の 物 子 卷
此 の 葉 又 去 此 其 の 中 一 神 宗 半 末

誰、袖の糸と 焼く 人 巨 庭 卯 五 卷

何と云ふか〜

月 け 杖 骨 を ぶ け 祭 多 有 立 ^{松代} 五 卷

儒門 何し あ〜 こと 云 志 子
あ〜 花 多 有 立 一 生 徒 此
も て か 一 二 何 の 物 無 れ

宗 之 の い ぶ ぶ 一 一 后 冬 五 五 一 五 二

